

川崎市文化協会会長賞

灯籠流しの思い出

井田小学校 5年生 熊坂 夢乃

夏に家族と江川せせらぎ遊歩道を散歩していたとき、灯籠が流れているのを見ました。日が沈み、あたりが暗くなっていたせせらぎに灯籠が光り輝いていて、いつもと違う光景に圧倒されたことを覚えています。せせらぎでは8月になると灯籠流しが行われます。5歳のころ、私も灯籠流しに参加したことがあります。

5歳ながらに私は和のイベントだと思ったのか、葛飾北斎の「富嶽三十六景」を灯籠に描いたことを今でも覚えています。灯籠流しを知りたくなり調べてみると、戦後間もなく命を落とした人々の遺族らの手作りで始まったのが由来で、灯籠とは死者の魂を吊って海などに流す日本の行事だということがわかりました。送り火の一種だと考えられていて、お盆の時期にあの世からこの世に戻ってきた死者の魂を、再びあの世に送り出すためです。こんなに身近にあった行事が深い意味のあるものと知り、驚きました。灯籠流しは光がとてもきれいで雰囲気がとてもよいので、たくさん人が集まります。知識を得るとより楽しめると思うので、日本人に限らずできるかぎりたくさんの人に広めていきたいと思います。

せせらぎで灯籠流しが行われるようになったのは2008年で、中原区と高津区の区境に整備されたせせらぎを中心に地域の交流だったということがわかり、確かに思い出すと灯籠を作っているときに「その絵、上手だね」などと、初めてあった人とも交流ができていたと思います。灯籠流しが行われる前に、人形劇団ひとみ座の伝統芝居「乙女文楽」が披露されます。灯籠は会員さんの手作りで、この灯籠を組み立てて思い思いの絵などを描いた灯籠約250個が水面を彩ります。灯籠が流されたときには、「きれいだね」などと声が上がり、しきりにシャッターを切るカメラ愛好家の姿も見られます。灯籠は約100メートル先で回収されます。市民の方にも喜ばれていて、私達も楽しんで見ることができる伝統なので、「この伝統を語り続け、守っていこう」という気持ちも込めて、この行事を行っているのかもしれない。

参加された皆さんの灯籠は色とりどりでとてもきれいで、さらに光がついたとき、水面に浮かぶ幻想的なハスのようでした。ご先祖様たちがこの灯籠から帰ると思うと、少し不思議な気持ちになりました。私は、地域に住んでいる人たちの思いを乗せたこの行事を多くの人に知ってもらい、何十年も続いてほしい、私も何らかの形で発信し続けていきたいと思っています。